新たに4件が市の指定文化財に

5月30日(月)付けで、「旧松井家住宅主屋」、「少彦名神社参籠殿」の建造物2件、「下敷水出土の動物化石群」、「神明神社のヒイラギ」の天然記念物2件、合わせて4件が市の指定文化財となりました。

今回の指定により市指定の文化財の数は187件になります。

旧松井家住宅主屋

大正15年（1926）、フィリピンで貿易会社を経営した松井國五郎によって建てられた別荘で、平成20年に、国の登録有形文化財になっています。

東南アジアからの南洋材のほか、当時としては新しい技術（コンクリート基礎など）を積極的に取り入れるなど、「近代和風の貴重な別荘建築」という点が評価されました。

旧松井家住宅主屋

少彦名神社参籠殿

昭和9年（1934）に少彦名神社参道沿いに建築された建物で、北側斜面に三方懸けで建てられ、床面積の約9割にあたる部分が急斜面にせり出しています。これは、市内に残る懸け造り建造物のなかで最大規模になります。

参籠殿の懸け造りには、伝統的な貫工法のほか、金属ボルトの使用といった近代的技術も積極的に取り入れられています。また、上部の平屋部分はガラス戸が3面にわたって巡らされ、開放的な室内空間を演出しています。これらの構造や意匠などが総合的に評価されました。

少彦名神社参籠殿

下敷水出土の動物化石群

昭和31年（1956）、旧肱川町の下敷水の石灰岩採石場で発見・採集されたものです。

平成26年に実施した再整理作業の結果、これらは更新世後期（12万6000年前～）以降の動物化石ということが判明しました。このうち、タイリクオオカミ、ヤベオオツノジカ、ニホンムカシジカなど、四国では初確認のものや、オオサンショウウオ、オコジョ、テングコウモリ、リュウキュウガモなどの希少性が高いものも含まれていることがわかりました。これら動物化石は、更新世末の四国島の形成や環境復元を知るうえで、学術的に価値が高いものとして評価されました。

上：猿の頭蓋骨
下：ヤベオオツノジカ
ほか

神明神社のヒイラギ

肱川中流域右岸の正山地区に所在しています。樹齢は約300年を数え、樹高は約7・6メートルになり、枝張り東西10・32メートル、南北8・8メートルと均整よく伸びた枝が美しい円形の樹冠をかたちづくっています。通常、ヒイラギの葉は、縁に鋸歯（ノコギリの刃）状のとげがありますが、老樹になると、葉にとげをもたなくなります。

本樹はこうした老樹の傾向がはっきりと現れていること、また、自然のヒイラギの形態を保っていることに加え、市内では最大級のヒイラギであることが評価のポイントとなりました。

神明神社のヒイラギ

【問い合わせ先】
文化スポーツ課　☎(57)9993

大洲の「ええモン」審査会

6月29日㈬、5回目となる大洲ええモンセレクション認定審査会が、大洲市文化研修センターで開催されました。

今回は、新規9業者17品目を含む14業者27品目の認定審査がありました。申請者による商品説明の後、5人の審査員が試食と質疑応答により、一品ずつ丁寧な審査を行いました。

認定された商品は、市が大洲ブランドとして重点的に支援し、認知度の向上と流通拡大を図り、地域産業の活性化につなげます。

熊本復興の一助に

市では、熊本地震で被災された人たちの救援に役立てていただくため、引き続き温かいご支援をお願いしています。

このたび、大洲喜多歯科医師会（西田唯志（ただし）会長）と、大洲スタンプ協同組合（二宮豊和（とよかず）理事長）が、それぞれ義援金を寄付されました。

現在、市内41カ所に設置している募金箱などを通じて、多くのみなさんから善意をお寄せいただいています。義援金は、みなさんの思いを込めて、被災地へお届けします。

安全で安心して暮らせる地域へ

7月5日㈫、「たいき地区青色防犯パトロール隊合同出発式」が大洲警察署にて行われました。二宮幸仁（ゆきひと）大洲警察署長は「大洲署管内の犯罪発生件数が減少傾向にある。今後もみなさんに地道な自主防犯活動をお願いしたい」とあいさつされました。

出発式後、74人の参加者が約70台の青パト車両に乗り込み、警察車両を先頭にそれぞれの地域をパトロールしました。

夏だプールだ

7月1日㈮、市内の幼稚園児136人が参加して、八幡浜・大洲地区運動公園水泳プール開園式が行われました。開園式では、くす玉割りなどの後、古式泳法「大洲神伝流」が披露されました。

その後プール開放となり、園児たちは「待ってました」とばかりに、真夏日の太陽の下で思い思いに水遊びを楽しんでいました。

6次産業化を推進 ～おおず加工品開発講座～

6月27日(月)、6次産業化の推進を目的として、「おおず加工品開発講座（第2回）」が開催されました。

これは、加工品を作っている農業者などを対象にして、市内の農産物を使い、新たな加工品を開発するためのポイントを学ぶ講座で、6月17日(金)から7月15日(金)までの間で5回実施されました。

この日は16人が参加し、はじめに、講師の米田佳代子(かよこ)先生より「食の安全安心を考える～地産地消の取り組みについて」をテーマに講義が行われ、食品表示の基礎や地産地消の必要性を学びました。

その後、参加者は大洲産の赤シソやタマネギを使ったドレッシングなどを作りました。ドレッシングは、煮沸消毒した瓶に詰め、ラベルを貼り、商品化への流れを体験しました。

参加した武田麗子(れいこ)さんは、「加工品を作るとき、食材はなるべく国産のものを購入し、添加物は入れないようにしている。身近な野菜を使って、いろんな料理を教えてもらえて幸せ」と感想を述べられました。

売れる商品づくり・販路開拓スキルアップ研修
～大洲ええモンセレクションブランド戦略支援事業～

7月4日(月)・5日(火)、大洲市内で製造・加工される食品、収穫される農林水産物の魅力を高めるため、流通や特産品開発の専門家がアドバイスを行うセミナーが開催されました。このセミナーは、大洲ええモンセレクションブランド戦略支援事業の一環で、3人の講師による講義と、個別相談がありました。

講義前のあいさつで武田産業経済部長は、「今日のセミナーは、参加されているみなさんが貪欲な気持ちで受講し、多くのヒントを持ち帰ってほしい」と話しました。

その後、「大洲ええモンセレクションの概要」、「地域特産品のトレンド」、「首都圏からみた売れる特産品とは」の3つのマーケティング講座があり、参加者は売れる特産品づくりのヒント、商談成功のポイント、消費者の動向などを学びました。また、個別相談の参加者は、商品サンプルやカタログを持参して、販路開拓に向けた商品の相談やアドバイスを受けました。

参加した幸野登吉(こうのの のりよし)さんは、「個別相談とセミナーに参加した。このセミナーでは、ヘルシー志向やナチュラル志向など、消費者のニーズを見極めるためのヒントをたくさん教えてもらった。今後は、より良い商品を生産し、商品価値を上げるための課題に取り組んでいく」と話されました。

次回のセミナーは11月に開催される予定です。

地域を守るエキスパート　No.12

シリーズ

大洲市を守る消防団員の活動や取り組みを、シリーズでご紹介します。

県大会出場へ
～大洲市消防団予子林分団・正山分団～

第30回愛媛県消防操法大会大洲喜多地区大会が、6月5日(日)大洲市若宮の五郎大橋上流河川敷グラウンドで開催されました。

この大会は、消防団員の消防操法技術向上と、厳正な規律のもとでチームワークを身につけるとともに、士気高揚により、地域防災体制の強化を図ることを目的として行われています。

当日は、大洲市および内子町の各消防団を代表し、「ポンプ車操法の部」に5チーム、「小型ポンプ操法の部」に11チームが出場しました。

小型ポンプ操法の部　優勝　予子林分団

各チームが、数カ月間にわたる訓練の成果を発揮し、操法技術を競い合った結果、「ポンプ車操法の部」では内子町消防団内子分団が優勝、「小型ポンプ操法の部」では大洲市消防団予子林分団が優勝、正山分団が準優勝しました。

この3チームは、7月31日(日)に松山市の愛媛県消防学校大規模訓練場で開催予定の、第29回愛媛県消防操法大会へ出場します。

現在県大会に向けてさらなる訓練を重ねているみなさんには、上位成績を収められるよう、大いに期待しています。

小型ポンプ操法の部　準優勝　正山分団

文化財

新谷のムクエノキ
大洲市指定天然記念物
大洲市所有

新谷小学校内に自生する本樹は、推定樹齢500年以上を誇る老巨木で、枝張り東西約17.3m、南北18.2m、幹周約6.6mになり、県内でも比較的大きなムクエノキです。現在は樹高約12mですが、落雷や台風被害によって主幹の上部が折れる以前は、16m以上あったと推測されます。痛みが激しく、主幹には大きな空洞（樹洞）が形成され、樹皮内側の少しを残すのみですが、今でも多くの枝葉を茂らせています。

本樹のある新谷小学校は、藩政期には新谷藩陣屋が置かれ、新谷藩の中枢を担いました。本樹は、陣屋の設置以前から自生していたと思われ、新谷藩発展の「生き証人」とも言うべき存在になっています。現在では、新谷小学校の児童を温かく見守っています。

（昭和31年９月30日指定）

野　鳥

リュウキュウサンショウクイ（琉球山椒食）
スズメ目
サンショウクイ科
全長20cm

「ピリリリリッ、ピリリリリッ」と鈴を鳴らすような鳴き声で、樹木の上部で生活する小鳥です。名前の由来は、サンショウの実を食べ、辛くて鳴いているようだから、ということですが、実際は昆虫食なので食べません。あの嫌われ者のカメムシを平気で餌にします。

本来の生息地は南西諸島で、北限は九州南部でしたが、ここ10数年の間に四国南部でも確認され、最新情報ではさらに北上して、西条市でも観察されるようになりました。野生生物は、ほんの少しの気温の変動も敏感にキャッチして、新天地に勢力を拡大しているようです。温暖化に疎い人類は、生き物たちの信号をどう捉えているのでしょうか。

ＮＰＯ法人かわうそ復活プロジェクト㊇

国土交通省大洲河川国道事務所・山鳥坂ダム工事事務所だより

夏休み鹿野川ダム見学会

～鹿野川ダム　見て、学んで、作ろう～

夏休みに鹿野川ダムで小学生とその保護者を対象にしたダム見学会を開催します。この見学会では普段入ることができない「ダムの中」や改造工事を行っている現場を探検して、ダムについて楽しく学ぶことができます。

ぜひ今年の夏休みはダム見学会へお越しください。楽しいダム工作イベントも実施する予定です。

【日　時】

8月28日(日)

午前の部　午前9時集合

午後の部　午後1時集合

【場　所】

鹿野川ダム管理庁舎

（大洲市肱川町山鳥坂２８０）

【申し込み方法】

8月19日(金)午後5時までに、お電話にて担当者まで申し込みください。（受付時間は平日午前8時30分～午後5時）

※各時間帯約30人ずつ、所要時間3時間程度を予定しています。

警報発令時、台風接近時または鹿野川ダムが洪水対応を行う場合、中止となる可能性があります。また、応募者多数の場合は申し込みを早めに締め切る場合がありますのでご了承ください。

※小学生とその保護者での参加を原則としていますが、一般の方の参加も受け付けます。なお、見学に際しては、急な階段の上り下りもありますので、あらかじめご了承ください。

【申し込み・問い合わせ先】

山鳥坂ダム工事事務所

☎㉞３０００

（担当：合田・吉岡）

大洲商工会議所青年部　大洲ご当地クイズ

８月といえば、花火大会に夏休みと、楽しいことがたくさんあります。人づくり、街づくりを目指し、平成16年から行われているえひめYOSAKOI祭りの今年のテーマは「熱き想い みんなに届け！伊予のよさ魂（だま）」として８月21日(日)に開催されるようです。

楽しみにしている踊り子さん、それを見て楽しむみなさん、今年も熱いえひめYOSAKOI祭りが待ち遠しいですね。

【今月のクイズ】

えひめYOSAKOI祭りをスタートさせたのは、次のうちどの団体でしょうか。

① 大洲商工会青年部

② 大洲商工会議所青年部

③ 大洲青年会議所

【先月号のクイズの解答・解説】

「日本三大鵜飼（うかい）」の一つといわれる大洲のうかいは、鵜船（うぶね）と屋形船が手が届くほど近い距離で川を下るという、国内唯一の手法で楽しむ事ができます。その手法は何というでしょう。

① 並走うかい

② 合わせうかい

③ 川下りうかい

回答…②

解説…全国でうかいは行われていますが、大洲のうかいは大迫力。鵜船と屋形船を並走させながら、鵜がアユを捕獲する様子を間近で見ることができます。ぜひ、今年の夏はうかいを楽しんではいかがでしょうか。

※今月のクイズの答えは、広報大洲９月号に掲載します。

シリーズ・大洲市地域づくり表彰

平成27年度「大洲市地域づくり表彰」を受賞されたみなさん（3団体）を、シリーズでご紹介します。

菅田地区社会福祉協議会

会長　安藤　光郎（みつろう）さん

【地域住民の幸せを願って】

菅田地区社会福祉協議会は、昭和46年に設立されました。地区住民の福祉の増進を目的に、現在約50人の構成員で活動しています。

主な活動として、独居高齢者への配食サービスや、誕生月プレゼント配布、「独居高齢者のつどい」の開催など、高齢者福祉活動を積極的に行っています。また、地元で生まれた新生児へのプレゼントも毎月行っています。

平成21年からは、大洲市社会福祉協議会との共催で地元中学生との交流体験教室も行っています。史跡巡りや郷土料理教室などを通して、子どもたちの郷土愛が深まればと思います。

最近では、個人情報保護の観点から、私たちの活動にとって一番重要な、世帯情報を得ることが難しくなってきました。菅田地区では地道に各戸を回り、本人同意を得て独自の福祉名簿を作成することにより、慰問などを行うことができます。これは県下でも珍しい事例です。

これからも、地元に密着した明るく住みよいまちづくりに貢献しながら、新しい事業にも積極的に取り組んでいきたいと思います。

肱東中学校生との炭出し体験教室

ンダンクンダンク※　ＪＩＣＡセネガル通信　No.5

※ウォロフ語で「少しづつ」の意味

青年海外協力隊　藤本　顕允（あきまさ）　さん

アッサラーマレイクム。（ウォロフ語で「こんにちは」の意味）青年海外協力隊として西アフリカのセネガルで活動している藤本顕允です。

「ナカウォールビ」

６月に入り、いつものあいさつにこの一言が追加されました。「ラマダンはどう、調子はどう」という意味です。セネガルに来て２度目のラマダンが始まりました。ラマダン中は行きつけの朝ごはん屋さんやレストランが閉まってしまうため、断食をしていない私も現地の人と同じように少し元気が出ません。ラマダンの終わりまで残り２週間、ラマダン明けのお祭りを楽しみにして乗り切ります。

想定内の想定外

先日、任地でロバ車を使って井戸水を販売している業者を対象に研修会を開催しました。任地の衛生局と打ち合わせして、市内を歩き回って販売者リストを作り、案内の文書を渡し、衛生局担当者と最終確認して、「よし、準備完了」と迎えた研修会当日。

ハプニングの連続でした。朝、会場に行くと昨日一緒に最終打ち合わせをしたはずの担当者がいません。慌てて電話してみると、別の州へ出掛けたとのこと。さらに開始時間の10時になっても参加者は２、３人。30人以上案内して回ったはずが…。

最終的に別の担当者を確保し、20人近く参加者も来てくれて研修会を無事に実施できました。ある程度のハプニングは予想していましたが、一筋縄ではいかないセネガルの難しさを思い知らされました。

ヒントはセネガルの中に

研修会を実施し、参加者に向かって詳しく説明する姿や、参加者同士で活発に議論する姿を見て、問題解決のための知識や能力はすでにセネガルの中にあるということ、そしてボランティアの使命はその力を適切な場所で、適切な形で発揮させることだ、ということに気付かされました。この教訓を胸に、残り半年を駆け抜けたいと思います。

（現地時間2016年６月26日・セネガル生活552日目）

研修会の様子